

発行所
伊那市荒井
3500-1-401
上伊那教育会館内
長野県教職員組合
上伊那支部
編集発行人
田中 孝弘

上伊那支部 情報

2019年
8月20日
第10号
全職員配布

支部ホームページ <http://www.kamiina.jp/sub-domain/ntuuh/wordpress>
組合員用 パスワード : ntu2453

上伊那教育研究会 基調講演会記録 概要



『教師の仕事を導くもの、支えるもの』 —木村素衛の『表現愛』に即して—

講師 西村 拓生 先生

(奈良女子大学教授 教育システム研究開発センター長)

於 2019年6月14日(金) 伊那文化会館小ホール

表現することで自己が形成される

人間は表現しながら生きていて、表現することによって人間は自分を創っている。自分が生きる世界を創っている。表現はすなわち形成である。

人間は、外にある素材に働きかけることによって、自分が何者であるかを知ることができる。思いどおりにならない外の素材に形を表す。そこで自分が何者であるかを知ることができる。それが自覚となる。

例えば、人間は楽しいから笑うのではなく、笑うから楽しい。つまり、形が先にある、形によって自分の内側が創られる。

子どもと向き合う一瞬一瞬こそが

表現を導くアイデア(理念)はあらかじめどこかにあるわけではない。「表現」における人間の「内」と「外」との相互の働きかけのなかで生まれてくる。例えば、彫刻家にとって作品のアイデアは「一打の鑿(のみ)」ごとに、その行為のなかに現れてくる。

「一打の鑿」。一瞬一瞬、子どもとかわるときに、その瞬間に生まれている。私たちがやっているのはモノづくりではない。相手は人間なのである。子どもは思うようにならない。一人ひとりが歴史を背負って、そこにいる。だからこそ、鑿の一打ちを打っていく。

根底にあるのは無条件の肯定

善いものや美しいものを求めることを木村素衛は「エロス」と呼ぶ。私たちは善かれと思って働きかけている。それが「エロス」であるのだが、人間はどこまでいっても現実「アイデア」に到達することはできない。つまり、善いものや美しいものだけを求める人間は絶望するしかない。

もうひとつの愛、それが「アガペ」、許して愛するのが「アガペ」、つまり無条件の愛。それに対して、「エロス」は条件付きの愛。人間は「エロス」を求める生き方がコアにあり、それを包んで支えているのが「アガペ」である。

学校は何のためにあるのか。一人ひとりの子が今できな

いことをできるようにするためにある。「できる」に価値がある場所である。子どもも「できる」に向かって努力する。しかし、師が「できる」だけを追い求めていると、子の「できる」に向かって努力する力が萎えてしまう。できる・できないにかかわらず、まず自分がそこにある、そこに生きているということを受け入れられて愛される。それがあって初めて子どもは、「できる」ことに善き美しきものを求める。そうでないと、子どもにとって学校はしんどい場所になる。

『底ひ奈く深き愛なり

ますらをよ

いのちの限り

努めざめらめやも』(附属松本小の碑より)

これは『一切の条件を付けないで、無条件で、深い受容の愛があるからこそ、人間は善きものや美しいものを求める』ということを書いている。

今だからこそ切実な『表現愛』の教育思想を大事にしたい。人間は表現しながら形成していく。子どもも私たちが自分が表現することで自分を創っていく。本質はない。すべては自分の表現に委ねられている。設計図やマニュアルがないことに怯える必要はない。私たちにとっての石打ちをするなかで、アイデアが生まれてきて、それが美であり善である。それを抛り所として実践していくことができる。しかし、何が『美=善』であるかを示すアイデア(理念)は、あらかじめ与えられていない。表現・形成の『鑿の一打』の瞬間に生成しているのだから。教育の目標たるアイデアは、教育者と被教育者との「表現的交渉」としての教育的行為の中にこそ生成する。

よりよく生きるための力は「ありのまま」が無条件に肯定される経験によって支えられている。できる・できないにかかわらず、すべて肯定されている。それは子どもにも教師にも言える。